
夏の風

常盤夢人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夏の風

【Nコード】

N2463F

【作者名】

常盤夢人

【あらすじ】

19歳、大学で経済を専攻する司はとりあえず大学に通っていた。
19の夏を彰^{あきひ}、詩織^{しおり}、歩^{あゆみ}らとともに満喫しようとするのだが。。

はじまり

空は澄みきっていて、雲は当たり前前の様に白い。手をのばせば掴めるかもしれない。

ふと誰かが自分呼んだ気がした。しかし、勘違いだとすぐに気付いた。さつきから蝉の鳴き声に19の大事な夏がかき消されるのではと思う。

そう、俺は19歳の大学生で名前は青山司^{つかさ}。今、課題をそっちのけで夏休みを満喫する為の計画を練っている所だ。

「つかさあー、友達が来てるよ。」

やはり勘違いではなかった。母親が呼んでいたのだ。

一瞬、詩織^{しおり}が来たのかと思い、鏡で髪を整えたがそれはすぐにやる必要がない事だと分かった。ドタバタと走って2階にあがってくる音が聞こえたからだ。この音は、彰^{あきひ}だと思った。彰がドアを開けて入ってきた。彼は、斉藤彰。俺と同じ19で同じ大学の経済学科だ。彰とはたまたま入学式の時に席が隣で話したサッカーの話題で意気投合した。

まあ、大学と言っても2人はどうやって授業をサボって単位を取るかについて真剣になっている。彰は要領が良かった。それは、司も認めていた。

例えば、2人で同じ様に時間割りを組んで同じ位サボった。前期で司は8単位落としたのに、彰は一つも落とさなかった。

「司、歩^{あゆみ}が言ってたぞ、単位を落とさない様に勉強しろって。」

「彰だって同じ位しか勉強してないだろ。歩の言うなら後期は真面目に出席するかな。」

「馬鹿だな。歩はあゆみでも中嶋じゃなくてお前の母親の事だよ。」
そう俺の母親の名前は青山あゆみだ。彰は、してやったりと笑っていた。

はじまり（後書き）

読んでくれてありがとうございます。

7月末

結局、何をしに彰は俺の家に來たのだろうか。しかし、いつも何の理由もなく彰は俺の家に來る。さつき話しにでた中嶋歩や幼なじみの長谷川詩織もだ。大学から俺の実家まで近いという理由から主に4人のたまり場になっている。

中嶋歩は18で大学1年で経済学部。俺と彰の誕生日が6月だから19であるが歩と詩織はまだ誕生日がきてないから18だ。

長谷川詩織は、文学部である。しかし、蝉の鳴き声は相変わらず衰えない。ぼーっとしている訳にもいかない。なぜなら、7月中に大学に行つて締め切りが過ぎたレポートを頭を下げて提出しに行かなければならないからだ。

「おい、まだこのレポート終わってないのかよ。歩に嫌われるぞ。」
「うるさいつな。今から、やるんだよ。第一、このレポートとは関係ないだろう。」

そうは言つたものの、やはり詩織や彰に手伝つてもらつて終わらず事になりそうだ。なぜなら、今日はもう7月28日だからだ。そういえば、

「司は、時間にルーズだしだらしない」って歩に言われたつけ。あの日の夜は、胸がナイフで刺されたみたいに痛かった。大学から家までの距離がこんなに暗くて遠いと思つた事はなかった。

「おじやましまゝす」

この声は詩織の声だ。

「おばさん、相変わらず綺麗ですね。」

「あら、やだね。暑いでしょ。飲み物でも持つてくからね。司は部屋にいるよ。」

「ありがとうございます。」

遠くから会話が聞こえてくる。詩織は話し上手ですぐ人をその気に

させる。

詩織も部屋に入るなり俺のレポートから性格にいたるまで分析し、あんなに良いお母さんなのに、と嘆いた末に昼ご飯をおごれば手伝わない事もないと言ってきた。

もちろん、俺はもちろんその要求を飲むしかなかった。レポートを書いていたら詩織が

「そういえば、司と彰。夏休み8月2日は暇でしょ？」

「何で？」2人は、ほとんど同時に答えた。

「みんなで花火見に行こうと思って。」

「バイトだからパス」

俺の返答が気に入らないらしく

「歩も来るし、来なかったら、歩にレポート終わってない事言うから。」

こう言われると行かざる終えない。

いつもこんな調子で、詩織のペースに乗せられている。彰は、いつもそれが楽しい様だ。歩が来るなら良いか。2人が帰った後で、2人のおかげで完成したレポートをバックに大事にしまいながらふと思った。

7月末（後書き）

感想などお待ちしています。読んだ方は、よろしく願います。

集合！

目覚めは最悪だった。うるさいし、暑かった。何の音だろうと司は思う。携帯のアラームを設定した覚えはなかった。

とりあえず、枕もとにある陽気な音を奏でる携帯を手を取った。

「司、今どこなの？」

詩織のよく聞き覚えのある声がした。司は、何の事だろうと思ったが、すぐに謎は解けた。今日は、8月2日。つまり、みんなで花火に行く日である。シマツタと思うのと同時に目が完全に冴えわたった。

詩織に言い訳してもすぐにばれる事は分かっていた。だから、素直に謝って駅前まで急いだ。

詩織は、俺が寝坊するのが分かったのだろうか待ち合わせの30分前に電話をくれたから何とか間に合った。

どうせならもつとはやく起こしてくれと言おうとしたが、中学2年の時の約束に遅刻してビンタされたのを思い出すと言わない方が懸命だろうという事が、寝起きの頭でも即座に理解出来た。

待ち合わせ場所にはすでにみんな着いていた。

「セーフ」

2分前に駅の東口に着いた。

「遅いぞ」

彰が言った。

「司ちゃんらしくて良いんじゃない。」

この声は久しぶりに聞いた。歩の声だ。海でも行ったのだろうか夏休み前より肌が小麦色に焼けていた。

「感謝してよね。あたしのおかげで遅刻しなかったんだから。」

詩織が得意そうに言った。

「ありがとう。じゃあ、行くか！」

「お前が言ったって。」

すかさず、彰がつつこんでみんなに笑いがひろまった。電車で1時間半近く行った所が花火大会の会場だ。昨年まで家の近くの湖が会場だった。今年から場所を変えて大々的にやるって市の図書館の掲示板にポスターが貼ってあったのを思い出した。

何で花火を見に行くのに午前中に集まったかというと、詩織がみんな最近できた大型ショッピングモールに行こうと言い出したからだ。新しいものの好きの詩織らしい提案だった。

「何、ぼーっとしてんのよ。」

詩織に促されて駅の近くのショッピングモールへと3人を追いかけて入って行った。

夏の爽やかな風が司の背中を押した。やはり、空は晴れわたっていた。

嫉妬

ショッピングモールは、できたばかりのせいだろうか、それとも夏休みで日曜日だからだろうか人であふれていた。

「詩織、ちよつとこの服とこれどっちが良いと思う？」

彰は、こちらにウインクしながら詩織に尋ねている。

彰は、司が歩のことを好きなのは知っている。彰なりに気を使ってくれているのだろう。彰のはからいで詩織と彰と別れて歩と2人になった。せつかく歩と2人になれたのに話す事はくだらない事ばかりだ。

歩は俺といて楽しいのかなと司は不安に思った。

「ねえ、司聞いているの？」

歩の声で我にかえった。

「ああ、聞いているよ。」

すかさず、返事をした。

「じゃあ、どっちなの？」

「えっ、何が？」

「やっぱり、聞いてないじゃない。」

「ゴメン、ばーつとしてた。」

司は、仕方なく認めた。

「いいよ。彰にどっちのワンピースが似合うか聞いてくるから。」

そう言つて歩は彰と詩織を捜しに行つてしまった。いつも、歩と話す時だけ上手いかわかない気がした。言葉で説明するのは難しいが、何か上手いかわかないのだ。

1人でいてもしょうがないと司は思った。1人だけ人ごみに放り投げられた気分だ。みんなが誰かと話している気がした。人がみんな自分だけ仲間外れにしているのかも思えてくる。だから、みんなを捜しに歩の行つてしまった方に歩いた。

人で溢れかえっている店内を捜すのは容易ではないと思ったが、意

外とすぐに3人を見つけられた。みんなで楽しそうに話しているのを見ると、彰を羨ましく思わざるおえなかった。

嫉妬（後書き）

みなさんの感想、評価を受け付けています。よろしくお願いします。

あの頃

人ごみをぬう様にして4人で食事できそうな店を探した。

どの店も家族連れやカップルで溢れていた。みんなで昼ご飯を食べたら、もうすぐ花火だ。

以前の花火大会には、中学の時まで毎年とは行かないまでもよく行っていた。初めて花火に行ったのは家族とである。友達ともよく行ったのを家族連れやカップルを見て司は思い出した。1番印象に残ってるのは？って聞かれたら何だろうか。やっぱり、初めて花火を家族でみに行ったのか初めて女の子と2人で出掛けた中学1年のやつだろう。

女の子と言っても誘ったわけでも、誘われたわけでもない。たまたま家族と行ったらあいつも家族と来ていたのだ。あいつは、小学校は違っていた。俺の通っていた中学はほとんどが地元の小学校からの持ち上がりだ。あいつは、中学から引越してきて同じ中学のしかも同じクラスになった。

今、思うとあいつは最初はクラスに馴染んでなかったのかもしれない。ただ最初は、みんな警戒してか知らないが小学校から仲が良い奴らが固まっていたからかも知れない。また、俺もその1人だったかもしれない。あいつとは、同じクラスってだけで仲が良いわけでも悪いわけでもなかった。ただ、互いに顔と名前は知っていた。

母親同士は、最初のPTAで意気投合したらしい。

だから、あの時も家族とは別れて

「2人で見に行つてらっしゃい。」なんて言われて当惑する俺を残して置いていってしまったのだ。突然、2人にされたって気まずいだけだった。

「ほら、せっかくだから見に行こうよ。」

俺は、小学生のこの花火大会が初まった時からほとんど欠かさず見に来て見飽きていた。初めて見に行きた時の様な感動や新鮮さが失

われていたからかもしれない。花火は、まるで夏に咲くヒマワリのように見えていた。ヒマワリは、夏に咲くのは当たり前だし、見てもさほど感動はしないだろう。それに、見に行かなかったのは家族旅行をしていた小3、夏の風邪を引いていた小5の時だけだ。

しかし、俺のそんな意向を無視して、彼女が手を引つ張って俺を連れていった。おかげで、しばらくは学校では2人が付き合ってるって噂される羽目になった事、そして、俺が必死に疑惑を全否定した事も言う必要はないだろう。

「ほら、行くよ。」

今日もあの時と同じ様に歩に引つ張られて花火大会へと向かう事になりそうだ。

あの頃（後書き）

感想などをお待ちしています。

過去と健

ガタン、ゴトン、ガタン、

いつ乗っても司は、この電車を好きにはなれなかった。もう古いし、お世辞にも綺麗とは言えない車両だからだ。

唯一の良いと思うのは、ラッシュ時でも東京の電車の様にすし詰めにならない事ぐらいだ。

でも、母親の話だと近々この路線は廃線になって新しい路線が出来るらしい。(あくまで、母親から聞いた噂だが。)でも、工事やその話があり耳に入らないのからするとしばらく先の話のようだ。しかし、廃線になると聞くと淋しい気もするから不思議なものである。ずっと子どもだった頃から乗っていたせいだろうか。

高校には、よく詩織と健けんと通っていたつけ。

健っていうのは、杉山健。俺が高校2年の時に事故で亡くなってしまった。きつと、健がいなければ今、大学にすら通ってないかもしれない。きつと、詩織も通ってないかもしれない。

健は、運動も勉強もよく出来るやつだった。多分、どの小学校に1、2人はいるだろう。そういうやつと思ってくれば、すぐに想像がつくだろう。

中学の時には、サッカー部で強豪が多い県央大会で3位に入って県大会までいった。

確かあの中学校のサッカー部が県大会まで勝ち上がるのは、母親が中学校にいた時以来の快挙だったらしい。勉強も学年ではいつも10番以内には入っていた。

「この辺りだね。健ちゃんが事故にあったの。」

突然、詩織が話し掛けてきた。

司は、忘れるはずないだろと思いつながら黙って頷いた。

そつえば、健が事故に遭った日も今日の様な空だった。

あれは、忘れもしない8月17日だった。

「何か考え事か？」

彰が心配そうな顔で尋ねてきた。

「いいや。何でもない。」

そう言つて、花火が終わったら8月17日前に健の墓参りに1人で行くことにした。

司は、もう考えるのをやめる事にした。

健が過去は悔やんでも変わらないってよく言つてたから。

長い夏の夜

「ついたぞ。歩。」

司は、となりの席で司に寄り掛かかる様にして寝ていた歩を起こした。

司もいつの間にか寝ていた。起きると、この電車も花火大会まで行く人でかなり混雑してきていた。それよりも、歩が横で寄り掛かって寝ていたことの方がビックリしたのだが。

駅からでて花火大会の会場へと向かって歩いた。毎年来ているのに、とても懐かしい気がした。

「あつ、かき氷だ。」

いかにもわざとらしい。でも、調子の良い詩織に引つ張られて屋台まで連れていかれる司がいた。

「おじさん、イチゴ2つ。」

詩織が元気よく注文した。

「俺はいらないよ。」

「何言つてんのこういうのは男が払うつて相場でしょ。」

帰ろうとするのをとめられた。

仕方なく2人分払った。彰も歩の分を払ってるらしい。

「どうせなら、歩に買うんだった。」

独り言の様に言っただつもありなのに、スズムシの奏でる音にも掻き消されず詩織には聞こえていた。

「やっぱり、司は、歩のこと好きなんでしょう?」

「別に。」

ごまかそうとしたが、顔には嘘だつてかいてあるのは自分でも分かる。

「で、いつ告るの?司くん。」

意地悪そうな笑みを浮かべて詩織が聞いてくる。

「いつかな。」

言葉を濁した。言葉が最後まで司の口からでてくる前に詩織は話し始めている。

「じゃ、あたしが一役買っただけだろうか？うん。それがいいかな。」

詩織は、勝手に納得している。

「何が良いの？」

後から追い付いた歩が会話に入ってきた。

「だから、司が、」

「あれだよ、ほら、経済史のレポートについて話してたんだ。」

慌てて詩織が言おうとしてたのを司が遮った。

歩の背後では、彰が詩織と俺のやりとりから察したのだろうか笑っていた。

そんなに焦る事はないだろう。だって、夏の夜は暑くて長いのだろうか。

静寂

「ねえ、2人つきりになったんだから聞かせてよね。」

「何を？」俺は、わざとらしく聞き返した。

「歩についての想いに決まってるでしょ。」

何でよりによって詩織と2人になったかというと、彰が2組に別れようって提案したからだ。

そこまでは、良かったのだが彰が俺と歩で組ませようとする前に、詩織がじゃんけんで勝った方、負けた方で組もうなんて言い出した。それでも、確率は二分の一なのだが。どうやら、司は運にも見放されたりいって事がこれでハッキリした。

「どういう所が好きなん？」

詩織はしつこく聞いてくる。人の事にいちいち口をだしたがるのだ。

「別に好きなんて言っていないでしょ。」

そう答えてみたが

「ほら、夏休み前の経済基礎でノートとらなかったの歩をぼーっと見てたからでしょ。いっしょに出たのに目がおかしな方ずつとみてたしね。それで、教授に板書消されたんでしょ？別にいいんだよあたしは歩にこの事言っても。」

「分かった、わかった。」

「答えになってないじゃない。そんな事だと嫌われるよ。」

まったく余計なお世話である。

「あつ、クレープ食べてないね。」

「これも俺の奢りかよ。」

司がぶつきらぼくに言うと

「正解。」

まったく俺の財布の中は気にしていないらしい。

二人でクレープを食べながら歩いていると、

「優しい所かな。」

「えっ。」

「だからさっきの質問の答えだよ。」

司が言うと

「おお、素直に認めたね。」

時計を見ると10時を指そうとしていた。

「10時に駅前に集合だから戻るか。」

俺が提案して駅の方に歩きだした時、いきなり手を引っ張られた。

「ねえ、あたしじゃ付き合うのダメなの？」

一瞬、何を言ってるか分からなかった。

「あたし、優しくする。司の事好きなんだよ。」

突然でビックリした。

言葉を失うってこういう事なんだって司は思った。

「ゴメン。急にこんなの言われても困るよね。でも、歩と付き合うならいいかな。でも、あたし、司のこと。」

詩織の頬から涙がつつたっていた。

詩織が泣くのを見るのは健が亡くなった時以来だった。

自分が原因で泣くなんて夢にも思わなかった。

「もう、何も言わなくていいよ。」

なぜか司は、そつと詩織を抱きよせた。

祭の後の静寂と詩織の髪の香りが、心地良かった。

詩織がこんな風に想っていたなんて、全然気付いてやれなかった。

沈黙

あれから3日が経過しようとした。

司は、ただなんとなく過ごしている気がした。そう、なんとなくつて表現が1番適當だった。未だに、気持ちも整理できていない自分がいた。

ふと、健ならこういう時どうするんだろうと思った。あいつなら、なるようになるさなんて笑い飛ばしてくれそうだ。いや、何を賭けても良い。少なくとも俺の知ってる健は、そういうやつだ。

そういえば、健の命日までに墓参りに行く事にしたのを思い出した。

明日に行こうって決めて眠りについた。

朝、起きるとなんだかすっきりした気分だった。

何の夢をみたかなんて覚えてないけれど、とっても心地の良い夢をみたのは確からしい。

自分なんか中心に世界は廻ってないのはとつくの前から知っている。けれど、今、この町、いやこの空間だけは、じぶんを中心に動いている気がした。

ゆっくり仕度をしてから健の眠っている墓に向かった。

家から40分くらいの少し丘みだいになっている共同墓地の片隅にそれはある。

司は、自転車を丘のふもとでとめて、ゆっくりと丘をのぼっていく。やっとのぼり終わるって時に、人影が目に見えび込んできた。

誰だろう、そんな事を思いながら近付くと相手は振り返り、司に気

付いた様な感じだった。しかし、こちらを向いたままだ立っているだけだった。近付くと、そこには詩織が立っていた。

木の枝が風で揺れてザワザワと音をたてた。しかし、夏の風が司の背中を押してはくれなかった。

2人が黙って立っていた短いはずの時間がとてつもなく長く感じた。それは、サッカーで勝っている時のロスタイムの様に。

残暑

司は、携帯の着メロで起きた。
最初は、目覚ましかと思っただけど、司は目覚ましをかけていないのを思い出した。

またか、携帯の液晶をみて思った。
電話は、彰からだった。

ここ3日は、彰からの電話で起きていた。
大学は、3日前から始まっていた。

「今日も調子悪いの？」
ほんとは、風邪なんて嘘だった。ただ、何となく詩織と気まずくて会いたくなかった。
いつまでも、逃げてばかりはいられないだろう。

「今日、かなり良くなったから午後から行くよ。」
「歩も会いたがつてたよ。」
彰は、のんきなものである。
「一言、余計なんだよ。」
そう言って電話を切った。

この何日か、いや、夏休みの終わりから結論を先延ばしにして、逃げてただけだった。考えれば考えるほど、分からなくなる。
きっと、詩織も普段と何も変わらなく接してくれるだろう。これが、昨日の夜に出した答えだった。

カーテンを開けると久しぶりに見た太陽にくらっとした。まだ、夏と同じくらい暑い。

彰に行くと言ったからには、大学に行かなくてはならないだろう。大学に行く為の、調度良いきっかけが出来たと思えば良いだろう。

そもそも、前期は彰はあれだけサボっていたのに、後期になって急に大学に行くようになった。

最初は、真面目になったのかと関心して、俺も見習わなくては思った。

しかし、昨日、心配して家に来てくれた歩の話が謎を解きあかしてくれた。

彰は、テニスサークルに好きな人がいて、その子に会う為に大学に行っているらしい。

それを聞いて少しホッとした。

そして、昨日もその子と出かけるから来ないらしい。歩は、詩織をあえて誘わなかったそうだ。

どうやら、風邪が嘘って事も分かってるし、詩織の態度から俺と詩織の間で何かあるって感じいたらしい。

女の感は、鋭いものだど部屋に差し込む黄色っぽい様な夕日を見ながらしみじみと司は思った。

残暑 - 2 -

「元氣そうじゃない。」

歩がジューズをすすりながら言った。

「風邪が嘘って知ってたんでしょ？」

俺は、歩に問い掛けた。

「まあね。だって、詩織が司の所に様子でも見に行くこつって言わないから、おかしいって思ったのよ。」

「そのの何がおかしいの？」

司は、純粹に理由を尋ねた。

「だって、彼氏が風邪引いてたら、気になるでしょ！？それで、上手くいってないのかなと思ったの。」

少し、オレンジジューズをむせてしまった。

「俺は、詩織と付き合ってないよ。」

「えっ、そうなの！？」

これには、歩が驚いたらしい。

「そうだったの。司、ゴメンね。勘違いしてたみたい。今の忘れてね。」

わかりかし歩の推測は、当たってないわけではないが司は、何も言わなかった。

「あのさ、」

しばらくの沈黙の後、歩が口を開いた。

「あの、詩織ね。司の事が好きなんだよ。さっき、あたしが言っちゃったけれどさ。」

その時は、何も答えなかった。

でも、沸騰したみたいに顔が熱くなるのが分かった。

夏の暑さのせいでは、ない熱さだ。

「だから、司。今、フリーでしょ。好きな子がいないなら、詩織と付き合っ」

「歩は、彼氏とか好きな人いるの？」

会話を遮る様にして、俺は歩に聞いていた。自分でもよく分からな
いが、熱い物に触ると手を引っ込めるみたいな反射の様に、無意識
に歩に聞いていた。

「秘密だよん。」

笑いながら、歩は答えた。夕日のせいなのか、歩の顔も赤く見えた。

「じゃ、また明日ね。大学来なさいよ。詩織も心配してるはずだからさ。」

そう言っ
て歩は、帰っていった。

歩は、彼氏がいるのだろうか？

好きな人がいるのだろうか？

でも、詩織と俺を付き合わせたいなら、俺を少なくとも好きではな
いらしい。

それが、昨日の話。

もう、午後になろうとしていた。

相変わらず、太陽は容赦なく俺達と照らしていた。そして、俺達の未来も明るく照らし続けてくれる事だろう。

夏の月

司は、みんなが昼を食べるベンチに行った。

前と同じ様に3人が座っていた。前は、自分もあの中で楽しく話していたはずだった。周りからは、司が緊張しているのが手にとるように分かるだろう。

「よっ、司！久しぶり。」

彰が気付いて声をかけてくれた。

「久しぶり。」

歩、詩織とも挨拶を交わした。詩織を見るのは久しぶりだった。

そして、何事もなかった様に1日が過ぎようとしていた。講義が終わった帰り道、歩が

「久しぶりにみんなでどこかに食べに行こうよ。」

歩がみんなを誘うのは、珍しかった。

「悪い、今日、ちょっと用があるんだ。」

彰が少し気まずく断った。

「バイトか何か？」

「いや、まあ、いろいろとね。」

彰は、言葉を濁した。

「いいよ、行ってきた。咲ちゃんでしょう？」

「悪い、また明日ね！」

そう言い残して3人とは、逆方向に向かった。

「彰の好きな子、咲っていうんだ。」
司が呟いた。

「正確には、美咲だけどね。やさしくてさ。彰には、もったいないんだよ。」

歩が冗談まじりに説明してくれた。

「お二人さん。あたし、邪魔なら帰ろうか？」

歩がちやかしてくる。

「いいよ。3人で食べに行くんだろ。」

歩に話した時の俺の頬は、紅潮していたかもしれない。

「じゃあ、お言葉に甘えます。」

詩織がいきなり言ったので驚いた。

「じゃあね、お二人さん。」

そう言って、歩は悪戯っぽくウィンクして駅の方に行ってしまった。

「ゴメンね、歩とじゃなくて。それより、何か、司あたしの事避け

てない？」

ドキッとした。避けてはいない。でも、ぎくしゃくしていると俺も思う。

「詩織は、謝らなくていいんだよ。ほら、俺が詩織に返事しないから悪いんだよね。」

思っている事を言ったらなんかすっきりした。

「いいの。ゴメンね、いきなり告って。歩が好きなのにね、、あたしは、謝れてすっきりした。歩に電話して、3人で食べに行こっか。」

そう詩織が言った時に、司の口が勝手に話し出していた。

歩は、他の奴好きみたいだし。気にしないで。あと、返事だけど、俺も詩織が好きだよ。」

「、、いいよ、いまさら気をつかわないでさ。」

「俺は、本気だよ。詩織。」

何でこんな事を言ったか分からないが気付いたら発っしていた。

「付き合って、もし、別れたら気まずくなって友達に戻れないってずっと考えてた。でも、俺は分かったんだ。別れなければ、いい。それに、好きな気持ちに嘘はつけないんだ。」

「ありがとつ。」

また、詩織は泣いていた。夏と1番違うのは、嬉しくて泣いている

事だ。

月に微かに照らされた公園を2人きりで歩いた。

その時、公園の時間は2人を中心に廻ってるようだった。

満月

今日、司はいつもより早く家を出た。

今日という日を楽しみにして、早く起きてしまう事は誰にでもある事だ。良い例は、小学生の時の遠足。いつから、そんな事がなくなったのか。

その答えは、司しか知らないのだが、自分でもよく分からなかった。

つまり、司の場合は、今日がその何年ぶりの日だったのだ。いつも、時間ギリギリに着いく司は、とても新鮮な感じがした。

大学の授業が終わるのが待ち遠しかった。司は、時間が自分を焦らしている様にしか思えなかった。

時計の針が17時半を指そうとしていた頃に司は、公園にいた。

「待ったよね？」

その声を聞いたのは、司が公園に来てから30分後の事だった。

「いや、全然。どこに行きたい？」

長く待ちくたびれていた司だったが、逆に、詩織に質問してみた。

しばらく悩んだ後に詩織は、ここでいいやって言ってくれた。

あんまり、司が今月お金がないのを知っていたからかもしれない。司は、ありがたくこの公園を散歩する事にした。

この公園は、大学に割と近くてカップルとかがよく待ち合わせに利用している。

「司は、どこか行きたいの？」

って、詩織の質問に正直に詩織に合わせるつもりだったから考えてなかった、て答えた。

詩織は、あたしも同じだよって笑ってくれた。

司は、二人で話しながら公園を歩くのが、こんなにも楽しいなんて思わなかった。

くだらない話しか、していなかった。詩織とは、いつも普通に話してたのに、こうやって待ち合わせまでしてまで話すのは何か上手く言えないけれど、特別な感じた。

月に照らされて、初めて詩織とキスをした。

満月が二人を優しく見守っていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2463f/>

夏の風

2011年9月28日12時39分発行